

# BIRD RESEARCH NEWS

2014年3月号 Vol. 11 No. 3

- 参加型調査 シロチドリ繁殖状況調査
- 参加型調査 メジロとランチ♪プロジェクト
- 活動報告 調査研究支援プロジェクト
- 参加報告 市民科学の海外事情
- 生態図鑑 チュウサギ
- 参加報告 長谷川博先生退職記念講演
- お知らせ 認定NPO法人になりました

Photo by Atsuyoshi Urashima

## 参加型調査

### シロチドリ繁殖状況調査にご協力ください

守屋年史

小型のチドリの仲間であるシロチドリは、日本国内の砂浜や砂州などで繁殖するごく普通の水辺の鳥でした。しかし2002年に環境省が実施した鳥類繁殖分布調査や、1970年代から継続的に行われている全国のシギチドリ類モニタリング調査の結果からは著しい減少傾向が示されており、残念ながら現在も減少し続けています(2014年1月号に掲載の「生態図鑑シロチドリ」参照)。

そのような状況の中、2012年8月に発表された環境省の第4次レッドリストの改訂では、シロチドリは絶滅危惧Ⅱ類に指定され、保護の対象として注目されました。また、都道府県レベルでのレッドリストでも絶滅が危惧される種、もしくはそれに準ずる種として指定されるようになってきています(表1)。

表1. 各都道府県レッドリストのシロチドリ指定状況。

絶滅危惧Ⅰ類相当	千葉県, 三重県
絶滅危惧Ⅱ類相当	岩手県, 栃木県, 東京都, 神奈川県, 静岡県, 石川県, 福井県, 京都府, 大阪府, 徳島県, 山口県
準絶滅危惧相当	秋田県, 山形県, 茨城県, 群馬県, 山梨県, 愛知県, 岐阜県, 富山県, 和歌山県, 香川県, 鳥根県, 福岡県, 大分県, 長崎県, 宮崎県, 沖縄県

シロチドリの危機的な状況が認識されてきたことは大きな成果といえますが、今後効果的に保全を行っていくには、繁殖するための条件を明らかにし、優先的に保全すべき場所を抽出する必要があります。しかしながら、全国的な繁殖状況については、上述の2002年の繁殖分布調査(第6回自然環境保全基礎調査:環境省)以降実施されてい

せん。

そこで、シロチドリ繁殖状況調査を実施することにしました。前回までのシロチドリの生息状況調査では、各地から情報をいただき、ありがとうございました。寄せられた情報や文献から、海岸や河川、また人工海浜などに全国的に分布していることが分かりました。今回は一歩進めて、生息密度や繁殖環境も含めてシロチドリの繁殖状況を明らかにしたいと考えています。ぜひご協力ください。

- 調査時期:シロチドリの繁殖期  
(渡りの個体があまり混ざらない5~7月頃)

- 調査方法
  1. 砂地の場所を歩き、シロチドリ成鳥の個体数をカウント(観察できれば、幼鳥の有無なども)
  2. シロチドリがいた砂地の場所の広さを計測(例)海岸線を調査した距離×砂浜の幅
  3. 簡単な繁殖環境(植生、土質など)
  4. 繁殖状況の確認(ヒナがいたかなど)

- くわしくはこちら  
[http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/shiro\\_chidori/](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/shiro_chidori/)  
結果の送信もこちらからお願いします。



## 参加型調査

### 「メジロとランチ♪」プロジェクト 今年もご協力をお願いします！

大阪市立大学大学院理学研究科 堀江明香

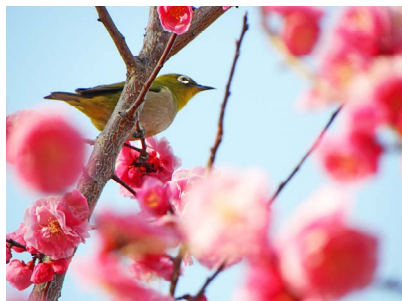


写真: メジロ

Photo by 武山智博

メジロは庭先や公園でも見られる身近な鳥ですが、意外と謎だらけ。私の調査や他の限られた情報からは、沖縄のメジロは2~3月に繁殖を始め、北日本のメジロは5~6月に繁殖を始め、多くの卵を産むらしいことが分かりました。しかし、その他のほとんどの地域では子育て情報がなく、各地のメジロたちがいつ繁殖するのかすら分かっていません。そこで昨年、全国の鳥好きの方と一緒に、さえずりから繁殖期を知る調査

を立ち上げました。その名も「メジロとランチ♪」プロジェクト。お昼にメジロのさえずりの有無をチェックする簡単な調査です。昨年の結果から、メジロたちは意外と早くからさえずり始めることが分かりました。今年はより詳しい傾向が探れたらと思っています。ぜひご協力をお願いします！

- 調査場所: メジロのいる公園など
- 調査期間: メジロのさえずり初認から8月くらいまで
- 調査時間: 11~13時の間に20分程度(長い分にはかまいません)
- 調査頻度: 月1~3回程度(多くても少なくともかまいません)
- 調査内容: さえずりの有無, 頻度区分(短時間/何度も/ずっと)を記録

■ 詳細はこちら

[http://www.bird-research.jp/1\\_katsudo/mejiro/index.html](http://www.bird-research.jp/1_katsudo/mejiro/index.html)

■ Facebookでも情報更新しています！

<https://www.facebook.com/mejirolunch>

## 活動報告

### 調査研究支援プロジェクト 2013年度支援結果のご報告

高木憲太郎

バードリサーチ調査研究支援プロジェクトへのご協力、ありがとうございました。3月20日にその投票結果がまとまりましたので、ご報告いたします。

昨年は、支援先を決めずにご寄付いただいたものが多かったのですが、一転、今年は投票先を決めてご寄付いただいたものが多くなりました。魅力的な内容のものが多かったことや、支援先の研究者自身で宣伝していただいた効果も高かったように思います。たくさんのご投票とご寄付をいただき、本当にありがとうございました。結果、2012年12月27日から2013年3月5日までに、194票の投票があり、585,000円の支援金を集めることができました。このうち2割を8件の調査・研究プランに均等割りで分配し、8割を得票数に応じて分配して、各調査・研究プランへの支援額を確定しました。

得票数の状況は、随時ホームページでお知らせしてきました。投票期間の前半は、「利根川中流域のタマシギ」、「闇夜の湿原から聞こえる謎の声」が安定して得票を重ねていく展開でしたが、後半からは、「ベトナムの鳥の復興」と「アリスイの首振り行動の謎」が上位に上がってきました。しかしタマシギの集票力は大きく、最終的に38票を獲得し、ダントツのトップでした。この

他、上位陣の獲得票数は図のとおりです。

会員の皆様にメールやニューズレターでご参加を呼びかけたほか、年報をご送付する際にパンフレットも郵送させていただきました。生態学関係のメーリングリストや鳥関係のメーリングリスト、Twitterでも呼びかけを行ないました。また、多くの方にクチコミで宣伝していただきました。ご協力いただいた皆さまに深くお礼申し上げます。

バードリサーチでは、支援先と寄付者をつなぐ工夫や、全国からの情報収集など金銭面以外でも各調査・研究プランの活動を支援していく予定です。また、各支援先には、1年後に活動成果のご報告をお願いしています。楽しみにお待ちください。

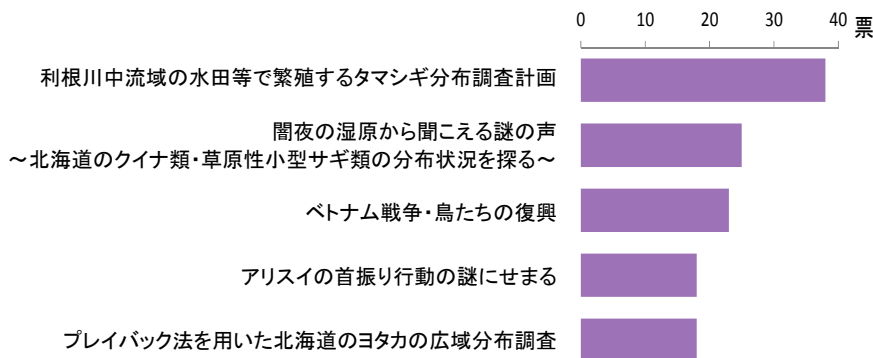


図. 上位5位までの得票数

# 参加報告

## 市民科学シンポジウム@生態学会 ～市民科学の海外事情～ 神山和夫

3月14日～18日に広島で開催された第61回日本生態学会の中で、15日に行われた市民科学に関するシンポジウム「Citizen science: New approach for contributing to success of science, education and conservation」に参加してきました。このシンポジウムは、東京都市大学の小堀洋美先生たちが中心となり、アメリカのCornell Lab of Ornithology (以下、コーネル大学)のJanis Dickinsonさんを招いて開かれたもので、市民科学に関する国内外の話題を提供しました。その中から、海外事情について興味深かった話題をご紹介します。

### アメリカの市民科学は新時代へ

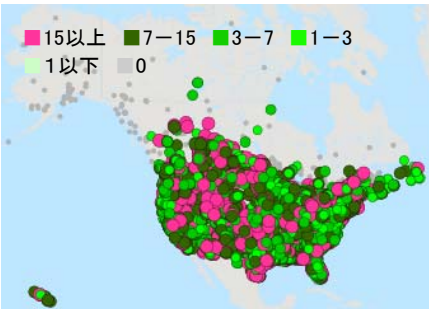


図1. Great Backyard Bird Countで記録されたイェズメ(2013年2月)  
<http://gbbc.birdcount.org/>

市民科学とは科学者と市民が協同で実施する調査研究のことで、幅広い分野で行われており、特に野鳥研究では市民参加型調査が広く実施されています。

アメリカではいま、市民科学が活発化し、新たな時代を迎えているようです。インターネットが普及し、大人数が参加する調査を低コストで行えるようになったことが理由のひとつで、コーネル大学では日本よりもはるかに大規模な参加型調査を行っています。

100年以上前から続いているクリスマスバードカウントがアメリカの市民参加型調査の草分けですが、インターネットを利用した記録収集を本格的に導入したのは、コーネル大学が1999年にスタートしたGreat Backyard Bird Count (GBBC)です。GBBCは毎年2月に調査を行います、2014年は144,109カ所から観察記録が集まったそうです。

GBBCのデータはeBirdというWebデータベースを使って集められます。eBirdはバードリサーチが提供している野鳥記録用Webデータベースのフィールドノート(Webサービスで利用できます)とよく似た仕組みですが、規模はずっと大きくて、2011年だけで160万件もの観察リストが登録されたそうです。フィールドノートが利用者の個人的なデータ管理を考えた作りになっているのに対して、eBirdは観察記録を視覚化することに重点が置かれており、入力されたデータは地図上に公開されます。日本では希少種保護の観点から位置は非公開にすることが多いのですが、eBirdには珍しい鳥が出るとメールで知らせてくれるサービスまであります。このように、どこでどんな鳥が出ているかをリアルタイムで確認できるというおもしろさが、利用者を増やしているように思います。eBirdは日本のデータも入力できますが、残念

ながら日本語には対応していません。

ユニークなものでは、参加者がお金を払って行う調査もあります。Feeder Watchという餌台に来る野鳥を記録する調査では、参加者は毎年15ドルを払って参加します。参加費をとることで調査の運営コストをまかない、その分成果の還元や調査のサポートを充実させることで参加者にもメリットがあります。2009-10年のシーズンの参加者は15,699名で、70%の人が翌年も続けて参加するそうです。

### イギリスの調査にみる市民科学の目的

ケンブリッジ大学の天野達也さんからは、イギリスの市民調査についての話題提供がありました。イギリスも市民参加型の野鳥調査が盛んな国ですが、その中で、The Royal Society of the Protection of Birds (RSPB)のBig Garden Birdwatchと、British Trust for Ornithology (BTO)のGarden Birdwatchという似たような名前の2つの調査について紹介してくださいました。前者は毎年60万人が参加する調査ですが、調査方法の制約がゆるやかなので、科学的な分析のためよりも啓発活動としての側面が強いようです。一方後者は調査範囲と調査時間が決められており、複雑な分析が可能なデータが得られています。このように類似した調査でも、市民に参加してもらって何を成し遂げるかということに、目的の違いがあることが分かります。

### 市民科学のこれから

欧米では記録を登録するためのタブレットやスマートフォンのアプリケーションが数多く開発されていて、調査に参加しやすい仕組みが作られているようです。市民参加型調査同士で参加者の獲得競争が起きるのではないかと天野さんの指摘は興味深いものでした。

ここで紹介した調査は参加者数や調査件数こそ日本で行われている調査よりも桁違いに大きいのですが、日本でも野鳥の観察データを記録している方はたくさんおられると思います。しかし記録の集約や蓄積、分析、公表といった面で課題があり、その解決が急がれます。

上記のアプリが各国語に対応すれば、現在欧米で行われている参加型調査のシステムのいくつかは日本を含め世界中で通用するでしょう。市民科学の世界にもグローバル化の流れがやってくるのかもしれませんが、日本でも、使いやすいITシステムの開発は急務になっているのではないかと考えさせられました。

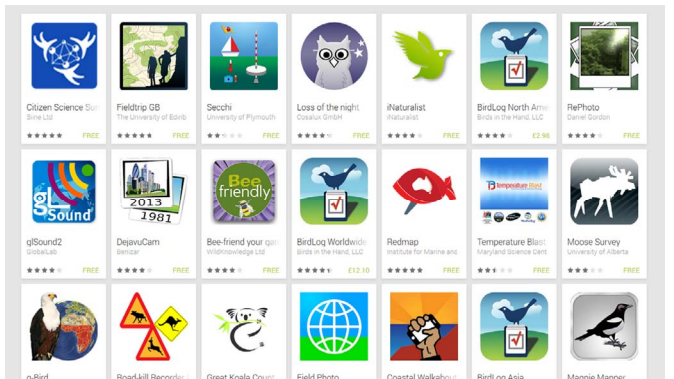


図2. スマートフォン用の参加型調査アプリ

# チュウサギ 英:Intermediate Egret 学: *Egretta intermedia*

## 1. 分類と形態

分類: ペリカン目サギ科

全長: 650-720 mm 翼長: 272-320 mm  
 尾長: 100-132 mm 嘴峰長: 67-80 mm  
 ふ蹠長: 100-121 mm 体重: 430-630 g  
 ※ 体重は著者らによる測定(2007-2009年, 茨城県, N=55). 全長はKushlan & Hancock (2004), 他は清棲 (1978) による.

### 羽色:

雌雄とも全身白色. 繁殖期には雌雄ともに胸や背にレース状の飾り羽がのび, 求愛ディスプレイではこれを扇状に誇示する. 特に背の飾り羽が長く, 尾を10cm余超え, 飛翔時にこの点でダイサギと区別し易い. 頭部に冠羽はない. 嘴は繁殖期には黒色, 非繁殖期には黄色で先端のみ黒色. 目先の裸出部は黄色(写真1, 2). 虹彩は淡黄色で, 求愛期には赤色. 脚は趾まで黒色. ダイサギと比べて頭部の丸みが強く, 嘴が短い.



写真1. 繁殖期のチュウサギ。嘴は黒色。目先の裸出部は黄色。  
[photo by 片山直樹]



写真2. 繁殖を終えた9月のチュウサギ。嘴から目先の裸出部まで黄色。  
[photo by 矢野 進]

### 鳴き声:

成鳥はグアア, ゴアアと鳴く. ねぐらや集団繁殖地(コロニー)以外ではほとんど鳴かない. ヒナはビッビッビッと鳴く.

## 2. 分布と生息環境

### 分布:

アフリカ, 東南アジア, 東アジア, オーストラリア東部に分布する. 日本でみられるのは亜種 *E. i. intermedia* で, 日本の本州以南から朝鮮半島南部, 中国南部, 東南アジア, インドで繁殖する. 越冬期もほぼ同じ範囲で見られるが, 日本や朝鮮半島, 中国南部の個体は, 東南アジアなどへ渡る. 他に, アフリカには亜種 *E. i. brachyrhynch* が, オーストラリア東部には亜種 *E. i. plumifera* が分布する (Kushlan & Hancock 2004).

### 生息環境:

平地の水辺. 主要な餌場は水田とその畦で, 他に湿地, 池沼, 草地でも採食するが, 海岸や干潟, 河川はほとんど利用しない. 他のコロニー性サギ類と混合で, 平地の樹林や竹林にコロニーを形成して繁殖する. 昼行性で, 夜間は繁殖期にはコロニーで, 非繁殖期には河川や湖沼の岸の樹上や杭上, 湿地で集団ねぐらをとる.

## 3. 生活史

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月



### 繁殖システム:

コロニー性. 留鳥の他のサギ類が繁殖を始めた後に飛来してコロニーに参入する. 一夫一妻で繁殖し, 雌雄とも同等に抱卵・抱雛に従事する.

### 巣:

樹林や竹林では中ほどから樹頂下の高さに, メダケなどのササ林では頂上に, 小枝を組み合わせ, 直径30cm, 高さ5~10cmほどの皿状の巣をかける. 巣材はコロニーの林床や付近の地上で拾って運ぶ. 巣の形が大方できると産卵を始め, 抱卵から育雛中も巣材を足して補修する.

### 卵:

淡青緑色で無斑. 楕円形で, 長径47~49mm, 短径35~40mm (Kushlan & Hancock 2004). 一腹卵数は3~5卵で, 4卵の例が多い(清棲 1978).

### 抱卵, 育雛期間, 巣立ち率:

著者による茨城県での調査では, 産卵は1~2日に1個のペースで, 初卵から抱卵し, ヒナは非同歩孵化する. 抱卵期間は20~25日, 巣上での育雛期間は30日ほど. 抱卵から育雛前期には片親が巣に留まり, 日中に3~5回交代する. 育雛後期には雌雄とも採餌へ出る. ヒナは巣を出た後もしばらくはコロニー内で親から給餌を受ける. 巣立ちヒナ数は3~4羽. 巣からのヒナの落下, カラスやヘビによる捕食, 餌を巡る兄弟間競争が, 巣立ち率を下げる.

### 渡り:

東日本での飛来時期は4月中旬から5月上旬頃で, 水田の湛水から田植えの時期と合致している. 繁殖後の分散は8月頃から始まり, 10月中旬頃まで各地で集団ねぐらをとって過ごした後, 数十から百羽ほどの群れで南へ渡る. 日本で標識放鳥され海外で回収された49個体のうち, 46個体はフィリピンでの回収で, 日本で繁殖したチュウサギの多くがフィリピンで越冬するとみられている(山階鳥類研究所 2002). 国内でも西日本など暖地では越冬する個体がいる.

## 4. 食性と採食行動

主にドジョウ, カエル, ザリガニを食べ, 他にヤゴなどの水生昆虫, バッタやコオロギなどの陸生昆虫, トカゲやカナヘビを食べる(写真3). 地上をゆっくり歩きながら採餌し, 数羽から十数羽の小群でまとまっていることが多い.



写真3. チュウサギの採餌内容の一例. 巣下にネットを張って回収したもの. 左はザリガニ, 右上はカエル, トカゲ. 中央はバッタ, コオロギ, ヤゴ. 下はドジョウ.

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 餌を巡る兄弟間の競争

ヒナは非同時孵化をするため、兄弟間に体格差ができ、その優劣の中で餌を巡る競争が繰り返される。要となるのは、ヒナの餌の食べ方が、孵化直後と成長後で異なることである。孵化後7日目ほどまでは、親が巣上に吐き出した餌をついばんで食べる(写真4)。その後体格が大きくなり、親の嘴を突いて餌ねだりができるようになると、親の嘴を直接挟んで嘴移しで給餌を受ける(写真5)。嘴移しでは餌をねだったヒナから給餌を受けるため、大きなヒナが満腹になった後に親が巣上に餌を吐き出さなければ、末っ子は餌にありつけず、やがて餓死したり兄弟から激しく突かれて衰弱死する。親には末っ子の生死を勘案する仕草は見られず、死んだヒナは巣から放り出す。



写真4. 巣上で餌を吐き出して給餌する親と、それを食べようとする孵化後3日目(右)と1日目(中央)のヒナ。未孵化卵が2個(左)。巣近くに設置したウェブカメラで撮影。



写真5. 写真4の4日後。孵化後7日目の第一ヒナ(左)が親から嘴移しで給餌を受け、5日目(奥)と4日目(中央)のヒナがおこぼれを待ち構えている。孵化後2日目の末っ子は下敷きになって見えない。

非同時孵化は、親の餌供給量に見合ったヒナ数を生き残らせてヒナの全滅を回避する繁殖戦略と考えられており、コサギ(井上1980, 1981)やアマサギ(藤岡2006)でも報告されている。

● 「準絶滅危惧種」の歴史といま

チュウサギは、かつては日本のシラサギ類の中で最も数が多く、各地のコロニーの優占種となっていた。しかし、1960~70年代に全国的に減少し、現在は準絶滅危惧種に指定されている。1980年の全国規模のアンケート調査では、37県79コロニーのサギ類の総数約47,800羽のうち、チュウサギは約1,300羽(3%)にとどまっていた(日本野鳥の会研究部 1981)。

戦後の宅地化や農薬汚染は、全国的にサギ類コロニーの小規模分散化を引き起こしてきた(成末 1992, 環境庁・日本野鳥の会 1994, 佐々木 2001)。中でもチュウサギの減少が著しいのは、水田の圃場整備による餌生物の減少が一因と考えられている。茨城県内の未整備(土製の用水路)と整備済み(コンクリート製の用水路)の水田で、アマサギとチュウサギの採餌個体数と利用餌生物を比較した Lane & Fujioka (1998)によると、陸生の昆虫やアマガエルを主食とするアマサギの個体数は、未整備・整備済み水田で差がなかった一方、水生の小動物を主食とするチュウサギは、整備済み水田で有意に少なかった。

チュウサギの減少の推移には地域差がある。1991~92年の全国調査では、コロニーに占めるチュウサギの割合

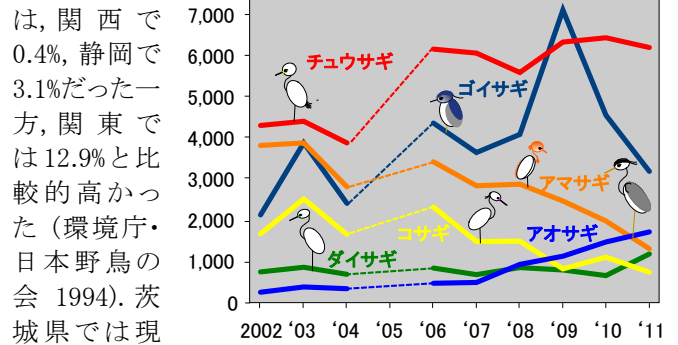


図1. 茨城県でのコロニー性サギ類6種の推定個体数。毎年形成される約20か所のコロニーで、小型ラジコンによる空撮を行ない、推定された個体数を合算した。2005年は空撮コロニー数が少ないため除外。Mashiko & Toquenaga (2013)を改変。

は、関西で0.4%、静岡で3.1%だった一方、関東では12.9%と比較的高かった(環境庁・日本野鳥の会 1994)。茨城県では現在もチュウサギはサギ類の優占種で、個体数も増加傾向にあ

る(Mashiko & Toquenaga 2013, 図1)。これは、霞ヶ浦周辺に広がるハス田が水田と並ぶ主要な餌場となっていることが一因と考えられる。

しかし、全国的な傾向は分かっていない。チュウサギのコロニー選択は、留鳥の他のサギ類が形成したコロニーに参入するかたちであり、チュウサギ自身がコロニー場所を新規開拓するのではないことを考えると、チュウサギの個体数維持には他種も関わっていると考えられる。コロニーの形成や消失の動態とあわせて、コロニー性サギ類各種の個体数をモニタリングしていく必要がある。

6. 引用・参考文献

藤岡正博. 2006. 生態図鑑アマサギ. バードリサーチニュース 3(4): 4-5.  
井上良和. 1980. コサギにおける非同時孵化に至る過程. 山階鳥研報 12:129-138.  
井上良和. 1981. 非同時孵化したコサギの同腹ヒナ間における生残の違い. 山階鳥研報 13:42-57.  
環境庁自然保護局・(財)日本野鳥の会. 1994. 第4回自然環境保全基礎調査 動物調査報告書(鳥類の集団繁殖地及び集団ねぐら). 環境庁, 東京.  
清棲幸保. 1978. 日本鳥類大図鑑III. 講談社, 東京.  
Kushlan, J. A. & Hancock, J. A. 2004. The Herons. Oxford University Press, New York.  
Lane, S. J. & Fujioka, M. 1998. The impact of changes in irrigation practices on the distribution of foraging egrets and herons (Ardeidae) in the rice fields of central Japan. Biological Conservation 83: 221-230.  
Mashiko, M. & Toquenaga, Y. 2013. Increasing variation in population size and species composition ratio in mixed-species heron colonies in Japan. Forktail 29: 71-77.  
成末雅恵. 1992. 埼玉県におけるサギ類の集団繁殖地の変遷. Strix 11:189-209.  
日本野鳥の会研究部. 1981. アンケート法によるサギ類のコロニーと埤に関する調査. 財団法人日本野鳥の会, 東京.  
佐々木凡子. 2001. 京都府におけるサギ類の集団繁殖地の分布と保護. Strix 19: 149-160.  
山階鳥類研究所. 2002. 鳥類アトラス(鳥類回収記録解析報告書). 財団法人山階鳥類研究所, 我孫子.

執筆者

益子美由希 筑波大学大学院 生命環境科学研究科

小学1年で鳥好きになり、地元茨城の低山の鳥を見て育ちました。卒業研究から鷺師修行を始めて6年。サギを追って茨城各地を走り回り、過去50年の茨城鷺史の編纂と解析に明け暮れました。今後は日本各地の鷺史をまとめて、長期動態を明らかにしていきたいと思ひます。



# 参加報告

## アホウドリからオキノタユウへ ～長谷川博先生退職記念講演～

青山夕貴子



写真1. 満員御礼の会場。立ち見の方も。

3月8日(土)に東邦大学で開催された野生生物保全研究センター設立記念シンポジウム兼長谷川博教授退職記念講演「希少鳥類の未来を考える」に参加してきました。ヤンバルクイナ、ライチョウ、タンチョウ、コウノトリに関する魅力的な発表がありましたが、やはりここでは長谷川先生の退職記念講演についてご紹介したいと思います。

長谷川先生は半生をかけてアホウドリの保全に取り組んでこられました。アホウドリは1949年に絶滅宣言が出されましたが、1951年に鳥島で再発見されました。1977年に初めて鳥島を訪れた長谷川先生は、アホウドリの繁殖成功率が悪く、危機的状況にあることを目の当たりにされ、以来、営巣地を安定させるための植生回復や砂防工事、新コロ

ニーの形成と、「こうすれば、こうなる」という明確な予測とそれを実現するための緻密な計画を次々と実行してこられました。その結果、ほぼ長谷川先生の予測通りに、鳥島のアホウドリは劇的な増加を見せ、最初の上陸調査では成鳥若鳥合わせて71羽、ヒナ15羽しか見られなかったものが、2013年の繁殖シーズンには繁殖つがい数609組、繁殖期後の総個体数は約3,550羽にまで達しました。

アホウドリという名前は、陸上でののんびりした動きになぞらえてつけられたもので、そのためにこの鳥は乱獲され絶滅寸前まで追いやられました。一方アホウドリには、悠然と沖の海上を舞う姿に尊敬の意を込めてつけられた“オキノタユウ(沖の太夫)”という別名があります。長谷川先生は以前から、「ツルより長生きでオシドリより夫婦仲が良いこの鳥を“オキノタユウ”に改名しよう」と提案しています。

長谷川先生は今年で退職されますが、「鳥島の個体群が5,000羽になるまでは調査を続ける」と言われていましたので、その言葉通り、これからもアホ...いえオキノタユウとのお付き合いを続けていかれることと思います。



写真2. アホウドリ(右)とコアホウドリ(左)。ミッドウェイにて。鳥島で増えた個体群が分散し、ミッドウェイでも繁殖を始めている。

# お知らせ

## 認定NPO法人になりました

神山和夫

3月13日、バードリサーチは認定NPO法人になりました。広く市民から支援を受けていることや事業活動が適切であることなどの要件を満たして認定NPO法人になると、税制の優遇措置を受けることができます。

鳩山内閣の時代に「新しい公共」という考え方が打ち出されました。これは、従来は行政が提供してきた公共サービスをNPOなども担えるようにしようというものでしたが、行政には税金という財源があるのに対して、NPOは十分にお金を持っているわけではありません。そこで2012年のNPO法改正で、それまで要件が厳しかった認定NPO制度が改め

られ、より多くのNPOが認定を受けられるようになりました。NPOの支援者は認定NPOに寄付をすれば減税され(図)、NPOも認

寄付金合計額 - 2千円 = 所得控除額

または

寄付金合計額 - 2千円 × 40% = 税額控除額

※いずれも寄付金合計額は所得の40%が上限

図. 認定NPOへの寄付によって受けられる控除

定を受けることで法人税の減免措置を受けられます。これには、公共サービスのための資金の流れを、行政だけでなくNPOにも移していこうという考え方があります。

バードリサーチは、これまでご支援くださったみなさまのおかげで、認定を受けることができました。認定NPOとして税制の優遇措置を受けることは、社会に対してより大きな責任を負うことでもあります。一層の努力をして参りますので、今後ともよろしくお願いたします。

バードリサーチニュース 2014年3月号 Vol.11 No.3

2014年3月31日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ  
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9  
TEL & FAX 042-401-8661  
E-mail: br@bird-research.jp URL: http://www.bird-research.jp

発行者: 植田睦之 編集者: 青山夕貴子・守屋年史

表紙の写真: ウソ